

令和 7 年 6 月 26 日現在

機関番号：30127

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2024

課題番号：19K10872

研究課題名（和文）非がん性慢性痛を抱えたがん患者に対するオピオイド鎮痛薬治療の現状と課題

研究課題名（英文）Current status of opioid analgesic treatment for cancer survivor with non-cancer chronic pain in Japan

研究代表者

進藤 ゆかり（Shindo, Yukari）

日本医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：70433141

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、がんサバイバーに生じる非がん性慢性痛（術後創部痛や化学療法、放射線療法等のがん治療が原因の痛みや、がんと関係ない痛み）に対する、看護師側のオピオイド鎮痛薬処方に関する認識と現状、課題を明らかにすることを目的に実施した。研究参加者として、がん看護専門看護師や認定看護師数名にリモート面接調査を実施した。結果、看護師は多様な背景を持つがんサバイバーの痛みに対して、医師と相談しながら痛みの原因と生活への影響をアセスメントし、日常生活への支障を軽減すべく支援していた。痛みの表現が難しい患者に対して、痛みの評価が難しく、短期入院によって適切な疼痛コントロールを図っていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がんサバイバーとは、がんと診断を受けた後も生存している患者のことをいう。がんは日本人の死因の第1位であり、現在もがんによる死亡者は増加から横ばいに推移しているが、その割合は全死亡の24%を占める。一方で、がん患者の5年生存率は年々上昇し、60%程度まで改善してきている。その結果、痛みを訴えるがんサバイバーが増加し、深刻な問題となっている。本研究はがんサバイバーが持つ非がん性慢性痛に対する、看護職のオピオイド鎮痛薬処方に関する現状を明らかにし、がんサバイバーに生じる非がん性慢性痛に対する正しい看護介入のありかたを検討し、本邦における非がん性慢性痛に関する看護教育のための基礎資料の1つを提供した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the perception, current situation, and issues of nurses' perception of opioid analgesic prescription for non-cancer chronic pain (postoperative wound pain, pain caused by cancer treatments such as chemotherapy and radiation therapy, and pain not related to cancer). As a result, nurses assessed the causes of pain and its impact on daily life in consultation with doctors for cancer survivors from diverse backgrounds, and provided support to reduce the disruption to daily life. It was difficult to evaluate pain for patients who had difficulty expressing pain in the elderly, and appropriate pain control was sought through short-term hospitalization.

研究分野：地域・在宅看護学

キーワード：非がん性慢性痛 オピオイド鎮痛薬 がんサバイバー 慢性疼痛

## 様式 C - 19, F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、がん患者(がんサバイバー)に生じる非がん性慢性痛に対する認識と診断の誤りによる、安易で不適切なオピオイド鎮痛薬処方にまつわる問題が浮上している。がん患者(がんサバイバー)の平均5年生存率が約65%となった現在の日本では、がん患者(がんサバイバー)の持つ痛みが“がん”そのものを原因とするものだけではなく、手術後の創部痛や化学療法、放射線療法等の“がん”治療が原因となる痛み、さらに筋肉痛や腰痛、帯状疱疹後神経痛などの“がん”と関係ない痛みなど、その痛みの種類は多岐にわたる(山代ら, 2013)。この痛みは、まさにがん患者(がんサバイバー)の“非がん性慢性痛”である。

非がん性慢性痛におけるオピオイド治療のゴールは、痛みの軽減そのものではなく、痛みによって失った生活を取り戻し、痛みがあっても元の正常な生活に近づけることである(日本ペインクリニック学会, 2017)。欧米では非がん性慢性痛に対するオピオイド治療ガイドライン発表以降、その有効性と共に、長期間の投与や高用量処方による腸機能障害、性腺機能障害、乱用、依存といった深刻な問題が報告されてきた(Nobel et al. 2010)。オピオイド鎮痛薬は、麻薬性鎮痛薬と非麻薬性鎮痛薬に大別されるが、日本のオピオイド適応は、ほぼがん性疼痛に限られ、非がん性慢性痛の適応は少ない(日本ペインクリニック学会, 2017)。がん患者(がんサバイバー)が抱える“非がん性慢性痛”に対する治療は、非がん性慢性痛に準じたものでなくてはならない。ところが、緩和ケア領域では、非がん性慢性痛の原因と治療の理解がまだ完全に普及しておらず、がん患者(がんサバイバー)の痛みだから、即“がん性疼痛”と考え、安易にWHOがん疼痛ガイドラインに準じてオピオイド鎮痛薬がレスキューも含めて投与され、依存を生じるという問題が生じ始めていた(権ら, 2016)。つまり、がんサバイバーの持つ“がん”治療が原因となる痛みや、“がん”と関係ない痛みといった“非がん性慢性痛”を完全に取るために、痛みが取れるまでオピオイド鎮痛薬を増量することやレスキューの無制限投与などを行えば、たとえがん患者(がんサバイバー)であっても依存が起こる。がん患者(がんサバイバー)の場合、制限なく多様なオピオイド鎮痛薬が処方可能なため、医療者はがん患者(がんサバイバー)の持つ痛みの種類( )を慎重に確認・診断した上で、オピオイドを処方しなければ、今後、オピオイドの弊害が日本社会にも蔓延する危険性が高い。

### 2. 研究の目的

本研究では1)看護者は、がん患者(がんサバイバー)に生じた痛みの種類をどのように確認・診断し、オピオイド鎮痛薬を処方・管理しているのか? 2)痛みの確認・診断、セルフコントロールを妨げるもの、促進するものは何か?を明らかにした。

### 3. 研究の方法

研究デザイン : 質的記述的研究

研究参加者: オピオイド鎮痛薬治療中のがんサバイバーを担当しているがん看護専門看護師や緩和ケア認定看護師等で、本人から研究参加の同意を得られる方数名に面接調査を実施した。今後、データが飽和に至るまで、追加調査を行う予定である。

データ収集・分析方法: 看護者に対して、がんサバイバーに生じた痛みに関してどのように種類を確認・診断し、オピオイド鎮痛薬処方を行い、管理しているのか? ケアサポートしているうえで、困っていること、良かったことなどはないか、約40~60分程度の半構造化面接調査(対面式か対象者の都合によってはZOOMを用いたりリモート面接)を1~2回程、実施した。対象者の同意を得た上で録画、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。面接内容はインタビューガイドに基づき、「対象者の年齢、職種、経過年数、がんサバイバーの原因疾患、がんサバイバーに対する痛みの確認方法(もしくは診断のしかた)、慢性痛コントロールを妨げるもの、促進するもの、支援で困難や判断に迷うと感じていることは何か? 社会的環境や制度で助けられたり、困ったことがあるか? 支援していく上での今後の目標」についてお聞きし、データは質的帰納的分析法を用い、比較検討しながらコード化カテゴリ化した。コード化終了後、インタビュー内容に齟齬がないかどうかデータの真実性の確保のために、インタビュー後、逐語録や要約コード化した内容をパスワード付きメールで送付し、その意味内容で間違いがないか確認していただいた。対象者への内容確認終了後、同じ概念用語やその持つ意味などを質的研究者である申請者を含め、複数の共同研究者で比較検討し、サブカテゴリ、カテゴリを抽出していく。分析結果について、共同研究者間で記述内容や解釈についての検討を重ね、研究者間の認識や抽出されたカテゴリの意味内容の適切性を検証する。

### 4. 研究成果

看護師は多様な背景を持つがんサバイバーの痛みに対して、医師と相談しながら痛みの原因と生活への影響をアセスメントし、日常生活への支障を軽減すべく支援していた。痛みの表現が難

しい認知機能が低下した患者等に対して、痛みの評価が難しく、短期入院によって適切な疼痛コントロールを図っていた。また、がんサバイバーである患者が、社会的に安定した生活を保持していくために、保険や経済的な社会サポートが必要であることが示唆された。今後は、さらにデータが飽和するまで対象者数を増やして追加調査していくとともに、オピオイド鎮痛薬処方をしている麻酔科医、がん・緩和ケア専門医、コメディカルである薬剤師や理学作業療法士などに対象を広げ、現状を明らかにしていく必要がある。

#### 引用文献

- 権哲, 細川豊史 (2016): 緩和医療における乱用, 依存, 医学の歩み. 259 (9) .913-916
- 日本ペインクリニック学会 (2017): 非がん慢性疼痛に対するオピオイド鎮痛薬処方ガイドライン改訂第2版. 真興交易(株) 医書出版部. 28-29.
- Nobel, M. et al. (2010): Long-term opioid management for chronic non cancer pain. Cochrane Database Syst Rev. 20: CD006605.
- 山代亜希子, 他 (2013): 緩和医療を受け持つペインクリニック診療における課題と展望. ペインクリニック 34. 760-770.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青柳 道子  (Aoyanagi michiko)  (30405675)	北海道大学・保健科学研究院・講師    (10101)	
研究分担者	塚本 美奈  (Tukamoto mina)  (30608500)	札幌医科大学・保健医療学部・講師    (20101)	
研究分担者	岩崎 創史  (Iwasaki soushi)  (90608910)	札幌医科大学・医学部・講師    (20101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関